『伽婢子』の異界譚

―「伊勢兵庫仙境に到る」の翻案方法をめぐって―

金　慧珍

一　はじめに

『伽婢子』巻六の一「伊勢兵庫仙境に到る」は、南海の離島「滄浪の国」という異界を舞台とする（以下、「伊勢兵庫」と略称）。この話は、明末刊の唐人百家小説の一、『五朝小説』杜陽雑編「処士元蔵幾云々」を原話とする（以下「元蔵幾」と略称）。

浅井了意は、原話「元蔵幾」を「伊勢兵庫」に翻案する際、原話の中国の海上仙境という題材に、観音菩薩の浄土とされる補陀落世界という設定を加えている。また、話の結末を、仙境を探索した伊勢兵庫頭の切腹という設定に書き換えている。

そこで了意が中国の異界訪問譚をどのように日本化したのかについて、補陀落世界に近いという「滄浪の国」の場所の設定、そして伊勢兵庫頭の切腹という結末の設定、この二点を糸口として明らかにしたい。

二　「滄浪の国」と補陀落世界

「伊勢兵庫」の舞台は伊豆の国に設定されている。冒頭では、後に相模国小田原城主を務めた北条氏康が登場し、家臣らを前に伊豆の七島の一、八丈島に流された鎮西八郎為朝の伝説を語る。そして、氏康が、誰か八丈島に赴き、探索して戻る者はいないかと尋ねると、家臣の中で坂見岡江雪や伊勢兵庫頭[1]が名乗り出た。

やがて、八丈島に辿り着いた江雪が探索を終え、伊豆に戻ったという簡単な記述がなされた後、八丈島を目指して

出かけたもう一人の家臣、伊勢兵庫頭の話が始まる。伊勢兵庫頭は南の方へと吹き流されて、ある島に漂着する。

夜るひるのさかひもなく、十日ばかり行ければ、風すこし吹よはり、ひとつの島にながれよりたり。(2)

原話「元蔵幾」では、遭難の中、元蔵幾だけが生き残り、ある島に辿り着く場面が続く。

蔵幾独リ破木ノ載スル所ト為リテ、殆ド半月ヲ経テ忽ニ洲島ノ間ニ達ス。(3)

原話の「半月」に対応する「伊勢兵庫」の「十日」からわかるように、離島を伊豆の沖より十日ほどで着くことのできる仙境に設定することによって中国ではなく日本から近い場所であることを仄めかしている。(4)

さて、岸に上がった伊勢兵庫頭の前に島民と思われる者が現れ、

此人（島民――稿者注）いふやう、「こゝをば滄浪の国と名づく。日本の地よりは南のかた三千里に及べり。

という。

この「滄浪の国」という名前は、原話「元蔵幾」の対応する場面で、

洲人其ノ従来ヲ問ヒ、蔵幾具（つぶさ）ニ以テ告グ。洲人ノ曰ク、此ノ方（ところ）ハ滄浪洲ノ中ニシテ中国ヲ去ルコト已ニ数万里ナリト。

と、島民が「滄浪洲」という名を口にしていることに基づいている。「伊勢兵庫」の仙境は、傍線部の中に、「三千里」とあり、繰り返しになるが、大陸から数万里離れているという原話の仙境に比べ、「伊勢兵庫」の仙境は日本の陸地に近くなっている。

原話の「滄浪洲」という島は、中国の海上仙境である十洲に区別される「滄海島」のことである。この十洲を説明する中国の道書『十洲記』（別名『海内十洲記』）の「聚窟洲附滄海島」の条に詳細な記述がみられる。

滄海島。在北海中。地方三千里。去岸二十一万里。海四面繞島。各広二千里。水皆蒼色。仙人謂之滄海也。島上倶是大山。積石至多。石象八石。石脳石桂。英流丹黄子石膽之輩百余種。皆生於島石。服之神仙長生。島中有紫石宮室。九老仙都所治。仙官数万人居焉。(5)

右の傍線部からわかるように、滄海島は北方の海にあり、その島の東西と南北は三千里、岸から二十一万里離れているとする。前掲のように、原話「元蔵幾」では滄浪洲について「中国ヲ去ルコト已ニ数万里」と、中国より数万里離れているとされていた。海のどの方角であるかは記されていないが、「数万里」という箇所は、この『十洲記』の「去

岸二十一万里」の箇所が参考にされたものかもしれない。さて、原話の「滄浪洲」の描写は、『十洲記』をはじめとする中国の道教的な仙境を描いた道書によっていると思われるが、伊勢兵庫頭が訪れた「滄浪の国」の描写も原話からの影響で、道教的な仙境のイメージが付与されている。(6)

ところで、「伊勢兵庫」では、原話「元蔵幾」では示されていなかった島がある方角を、「南のかた」と書き加えている。

『十洲記』の「在北海中」に対応する「伊勢兵庫」の「南のかた」という方角は、島民の台詞中、「滄浪の国」が観音菩薩の浄土とされる補陀落に近いという箇所と関連する。

これより観音の浄土補陀落世界も程ちかし。いにしへ淳和天皇の御時に橘の皇后のおほせによつて、恵蕚僧都といふ法師ばかりこそ、かの補陀落世界には渡りけれ。そのつゐでに此島にふねをよせて物語せられしと聞つたへたり。

右の傍線部のように、恵蕚法師の補陀落渡海説話に言及しているが、南海上にあるとされる補陀落に赴いた恵蕚法師と「伊勢兵庫」の話を関連させるため、滄浪の国を「南のかた」にあると設定したのである。

恵蕚法師は、橘の皇后（橘皇太后が正しい。檀林皇后とも―稿者注）に命じられ入唐した平安時代の僧であり、浅井了意著『阿弥陀経鼓吹』巻之一の十八「檀林皇后令レ示二知ラ人之不浄ヲ一」にこの法師についての記述が見られる。

昔本朝嵯峨天皇ノ后檀林皇后ト申シケル。（中略）深ク無常ノ理ヲサトリ後世ノ営ミニ心ヲ傾ケ五百領ノ袈裟ヲ手ヅカラ裁縫テ恵蕚法師ノ入唐スルニサシ添テ育王山ノ僧ニ供養シソノ外常ニ三宝ヲ貴ビ法華経ヲ写書シ諸ノ功徳ヲ積善根ヲ植玉フ。(7)

この恵蕚法師の入唐したことについては、『元亨釈書』巻第十六・力遊九の三〇五「唐補陀落寺慧蕚」に詳細が見られる。

釈慧蕚、斉衡ノ初応シテ二橘太后ノ詔ニ一齎テレ幣ヲ入唐、著ク二登莱ノ界ニ一。抵リ二雁門ニ一、上ル二五台ニ一。漸ク届ル二杭州ノ塩官県ノ霊池寺ニ一。謁シテ二斉安禅師ニ一、通ス二橘后之聘ヲ一得テ二義空長老ヲ一帰ル。又入テ二支那ニ一、重テ登ル二五台ニ一。適〳〵於テ二台嶺ニ一、感ス二観世音ノ像ヲ一。遂ニ以二大中十二年ヲ一、抱レ像ヲ道シテ二四明ニ一帰ル二本邦ニ一。船過テ二補陀之海浜ヲ一、附二著ス石上ニ一不レ得レ進コトヲ。舟人思テ二載物ノ重キコトヲ一、屢〳〵上ク二諸物ヲ一、船著クコト如レ元ノ。及テ二像出ルニ一船能ク泛フ。蕚度リ三像ノ止コトヲ二此ノ地ニ一、不レ忍ヒ二棄去ルニ一。哀慕シテ留ル。結テ二盧ヲ海嶠ニ一、以奉スレ像ヲ漸ク成ス二宝坊ヲ一。号二補陀落山

寺ト一。今為タリ二禅刹之名藍一。以レ萼ヲ為スト二開山祖ト一云。[8]

右の傍線部からわかるように、橘皇太后の命で入唐した恵萼法師が、中国の五台山に登り、そこで観音像を得、のち四明（明州――稿者注）を通って日本に帰国する途中でこの像と一緒に留まったところが、補陀落山寺となったという、唐補陀落山寺の開山逸話が記されている。

補陀落山とは、中国の山西省所在の昌国県の東海にあるとされる普陀山を意味する。[9]

中国で普陀山は、「補陀洛伽山」「洛伽山」とも呼ばれ、観音の浄土である補陀落世界があると信じられてきた。

また、補陀落山寺は、明の周応濱撰『重修普陀山志』に、「補陀洛伽山在昌国東海中」「洛伽山千二百菩薩所住（中略）此自梁恵鍔（鍔は萼の誤り――稿者注）後大者興建（中略）梁恵鍔日本僧首創観音院」と、[10] 普陀山寺は東海中にあって、日本の恵萼法師によって開かれたことが記されている。

前掲の『元亨釈書』における唐の補陀落山寺にまつわる恵萼法師の逸話は、『仏祖統紀』巻四十二によったところが多い。以下、本文を挙げる。

日本国娑門慧鍔、礼五台山得観音像。道四明将帰国。舟過補陀山、附著石上不得進。衆怖祈之曰、若尊像於海東機縁未熟、請留此山。舟即浮動。鍔哀慕不能去。乃結廬海上以奉之。（中略）乃迎至補陀山。山在大海中、去郡城東南水道六百里（以下略）。[11]

『仏祖統紀』では、右の傍線部を中心にみると、恵萼法師が五台山への巡礼を終え、そこで得た観音像を持ち故郷に戻る途中、普陀山附近で船が岩に乗り上げたまま動かなかったこと、そして恐れた人々が観音像に向って祈り、「もし尊像が海東へゆく機縁が熟していないのであれば、この山にお留まりあれ」と言って観音像を山に置くと船が動き出したと記されており、これが補陀落山寺開山の由来譚となっている。

ところで、伊勢兵庫頭は八丈島探索に向かう途中、南海上で漂流している。南海は、昔、遣唐使が日本から唐に向かった際に、使っていた海路であった。

遣唐使が最初使用した航路は朝鮮半島沿いを経由して中国に着く北路であったが、新羅の台頭によって徐々に南路へと変わっていったという。南路は、暗礁が多い上に海の流れも激しいため、風向きが良ければ目的地までの時間が短縮できるが、悪ければ遭難しやすいという特徴を持つ。[12]

実際に、前述の恵萼法師の逸話には、一行の船は遭難し、その遭難の地が観音信仰の霊場になったことが記されてお

り、一方、「伊勢兵庫」の話では、南海で漂流した伊勢兵庫頭が、辿り着いた場所が、観音浄土に近いところとする。

このように、恵蕚法師の補陀落渡海の逸話と「伊勢兵庫」における主人公の伊勢兵庫頭の漂流の話は、共に補陀落信仰に関係するところが共通し、また、伊勢兵庫頭が、この暗礁の多い南海上で漂流するのは、南の航路が遭難しやすかったという歴史的な事実と、偶然ではあろうが一致している。

三　補陀落世界と常世の国

以下では話の結びにおいて、原話の元蔵幾が神通力を駆使するようになったという結末が、伊勢兵庫頭の切腹という結末に書き換えられた意味について、近世における補陀落渡海の意味と関連させて考察していきたい。

話は後半にさしかかる。さて、仙境に赴いた時より遥かに早く伊豆の国に着いた伊勢兵庫頭だったが、主君氏康はすでに亡くなっていた。

舟よりあがりてまづ城中にまいりしかば、氏康ははや病死あり。氏政世をとりて、国家をおさめらる。

史実では、氏康の子の氏政が家督を継いだのは永禄二年（一五五九）十二月、氏康が病没したのは元亀二年（一五七一）十月である（ともに『国史大辞典』）。本話で伊勢兵庫頭が伊豆の国に戻った時期は、氏政の治世になってからどれくらい経っているのか記されてはいないが、かなり長い時間が経過していたと見るべきであろう。原話では、元蔵幾が故郷に戻ると唐王朝に変っており、貞元の年号になっていたとする。

旬日ナラズシテ即（すぐ）ニ東萊ニ達シ、其ノ国ヲ問ヘバ乃チ皇（みかど）ハ唐也。年号ヲ詢（たづ）ヌレバ、則チ貞元也。郷里ヲ訪（とぶら）ヘバ、則チ榛蕪（＝荒蕪）タリ。子孫ヲ追（もとむ）レバ皆疎属（＝遠縁）也。隋ノ大業元年自（よ）リ貞元末ニ至ルマデ、二百年ニ殆（ちか）シ。

元蔵幾が仙境に漂流した頃が隋王朝の大業元年であったので、二百年近くが過ぎていたとある。伊勢兵庫頭が仙境で過した月日は、原話での歳月より遥かに短いはずであるが、それでも仙境の時間はこの世の時間より遥かに早く流れることが示されている。

さて、そのあとには、主君氏康の死を知った伊勢兵庫頭が嘆き悲しむ場面が続く。

兵庫大に歎きかなしみ、涙とゝもにかの島の物がたりして、「むかし垂仁天皇は田道（たみち）の間守（まもり）に仰せて常世の国

につかはし、香菓をもとめ給ひし、これ今の橘なり。すでにとりて帰りしかば、帝ははや崩御ます。間守大になげきかなしみ「わが心ざしのいたらぬ故也」とて、なき死侍べりといふ。氏康すでに病死ありてたゞ今かへり来る事、これ心ざしをうしなふなり」とて、腹きつて死たり。

話は伊勢兵庫頭が切腹したとして結ばれているが、彼の言葉の中に出ている「常世の国」について触れておく。『日本書紀』巻第六・垂仁記に、垂仁天皇の命で常世の国に赴いた田道間守の話が載っている。

九十年春二月庚子朔。天皇命テ二田道間守ニ一。遣テ二常世国ニ一。令レ求二非時香菓ヲ一。香菓（キヤウ）。此云箇。俱能未今謂レ橘ト是也。九十九年秋七月戊午朔。天皇崩ジテ二於纏向宮ニ一。時年百四十歳。（中略）明クル年春三月辛未朔壬午。田道間守至レリレ自二常世国一。則賚物也非時香菓。（中略）田道間守。於是。泣悲テ歎テ之曰。受テ二命ヲ天朝ニ一（中略）得二還来ル一。今天皇。既ニ崩テ不レ得二復命一。(13)

右の傍線部からわかるように、田道間守が仙境の香果である橘の実を取って故郷に戻ると、すでに天皇は亡くなっていたとする。すなわち伊勢兵庫頭が仙境の珍品を得て伊豆に戻ると、主君氏康が亡くなっていることは、この垂仁記に書かれた田道間守の話を利用したものと思われる。従来、常世の国は、死後赴く国として認識されてきた。例えば、『古事記』上巻には、大国主の国造りのくだりで、少彦名神が国を固めた後、常世の国に渡ったとある。(14)また、『日本書紀』「雄略天皇二十二年」や、『万葉集』巻九「詠水江浦島子一首並短歌」には、浦島子が赴いた場所を常世の国としており、死の国であるとする。(15)このように、常世の国は死の国である。

原話では、その後の元蔵幾が霊鳥を操るなど神通力を駆使したことが描かれており、「伊勢兵庫」の結末は原話とはかけ離れたものとなっている。

では、この伊勢兵庫頭の死はどのような意味を持つのかについて補陀落渡海を手掛かりに考えたい。

近世における補陀落渡海は、十一世紀から十六世紀にかけては、補陀落世界をこの世にあるものとして生きたまま小船に乗って到達しようとした。十六世紀半ばから後半にかけては、補陀落世界をあの世にあるものとして入水によって浄土往生をめざすものであった。

前者が本来の補陀落渡海の姿で、これに死の意味が与えられるようになり、後者へと変質したものと捉えられる。(16)

五来重によれば、古来日本には死者を生きているように

して葬る儀礼があり、これには再生信仰が関与するという。補陀落渡海形式での水葬（死者を生きているようにして葬る形――稿者注）も死者が再生して現世に帰ったり、浄土へ行くと信じられたのであろうと指摘する。[17]

補陀落世界や渡海は、死のイメージを持っているのである。「伊勢兵庫」の主人公の死もまた、補陀落渡海における浄土に向けての往生という意味を持っているのではないだろうか。すなわち、補陀落世界も死のイメージを持っているという点において、常世の国と共通しているのである。話の前半で滄浪の国が観音の浄土とされる補陀落世界に近いところと設定されており、そこに行ってきた伊勢兵庫頭が死を選んだときに常世の国の話が持ち出されるのは、作者が、死のイメージを媒介にして、補陀落世界と常世の国を重ねようとしたためではないだろうか。言い換えれば、伊勢兵庫頭の死には、日本古来の常世信仰と外来の補陀落信仰の習合が見て取れるのである。勿論、これは了意の完全な独創ではなく、先に述べたように、『古事記』や、『日本書紀』、『万葉集』における死者の国としての常世の国の記述や、そして『華厳経』「入法界品」や、[18]『法華経』「普門品」[19]などの仏典における、人々が死後ゆくことを求める浄土としての補陀落世界についての描写は、こうした思想が中世の民衆にもあったことを示している。

だが、これを小説の上で書いたのは了意が初めてである。補陀落は死んでそこに赴くのが普通であるが、伊勢兵庫頭は、補陀落に行ってから死ぬことになっており、順序が逆ではあるが、結局は補陀落渡海の一種であることは間違いない。

四　おわりに

本稿では、「伊勢兵庫」を取り上げ、原話である「元蔵幾」を日本の話に翻案する際に用いた方法を明らかにしようとした。

了意は、原話「元蔵幾」の仙境である十洲の一「滄浪洲」を、恵蕚法師の補陀落山寺開山の逸話をヒントにして、南海にある、観音の浄土とされる補陀落世界に近い離島「滄浪の国」に漂流した伊勢兵庫頭の話に改めた。

そして、伊勢兵庫頭の切腹という結末には、浄土往生としての補陀落渡海の意味が込められており、また死のイメージを媒として、東方の他界とされる常世の国が補陀落に重ねられていた。これは、補陀落の常世化といえる。

「伊勢兵庫」において、主人公が訪れた「滄浪の国」に、道教的な仙境と仏教的な補陀落世界、さらには、記紀神話

の常世の国と、三つの異郷のイメージを重ね合わせることが了意の趣向であったのである。

【注】

（1）坂見岡江雪は、北条氏直の家臣として知られている。板部岡融成（号は江雪）かとの指摘がなされている。伊勢兵庫頭については、松田修・渡辺守邦・花田富二夫校注『伽婢子』（新日本古典文学大系七五、岩波書店、二〇〇一年）の脚注（一五一頁脚注二、同頁脚注一）では伊勢氏系譜に言及し、伊勢貞孝（?～永禄五年〈一五六二〉、伊勢貞為（永禄二年〈一五五九〉～慶長十四年〈一六〇九〉）の二人のほか、伊勢氏代々の多くが兵庫頭を歴任しているので特定がむずかしいとしている。「伊勢氏系譜」（『新訂寛政重修諸家譜』第八巻所収、続群書類従完成会、昭和四年）を見るに、右の脚注の指摘通り、右記の二人以外、貞親、貞陸、貞忠など兵庫頭を名乗った者は多数みられるが、いずれも氏康と時代的にずれがある。

（2）本文引用は、注1の前掲松田修ほか校注『伽婢子』による。以下『伽婢子』の引用は同じ。

（3）『五朝小説』の引用は、渡辺守邦「『五朝小説』と『伽婢子』（一）」（『実践国文学』第七〇巻、二〇〇六年十月）の書き下しによる。以下『五朝小説』の引用については同じ。

（4）『北条五代記』四十六「八丈嶋へ渡海の事」に「聞しは今、愚老伊豆の国下田と云在所へ行たりけるに、里人語しは「是より南海はるかにへだて、八丈島あり。此島は日本の地よりも唐国へ近く覚たり。（中略）然共此島をもろこしにてはいまだしらず。北条早雲の時代、関東より此島を見出し、伊豆の国の内に入たり。北条氏直時代迄は、三年に一度、伊豆の国下田より渡海あるに、（以下略）」とあるので、浅井了意はこれを参考にして滄浪の国の位置を設定したのではないかと思われる。（萩原龍夫校注『北条史料集』第二期戦国史料叢書一、人物往来社、昭和四十一年、本書の底本は、寛永十八年刊本）

（5）東方朔著『海内十洲記・神異経』（説庫第一冊、王文濡編輯、文明書局、一九一五年）。東方朔は、生没年未詳。前漢の武帝に仕えた人物。本書の成立時期については、魏晋の頃とする説と六朝期とする説（東方朔説を否定する説にあたる）など諸説がある（前掲書の解説）。

（6）例えば、「伊勢兵庫」における「滄浪の国」の仙人の住処や珍品などの描写である、「金闕・銀台・玉楼・紫閣」「九節の菖蒲酒、碧桃の花蘂酒」「碧瑠璃の色をあざむく棗、秦珊瑚のひかりをうつす栗」は、「元蔵幾」の「金闕・銀台・玉楼

紫閣」「菖蒲酒、桃花酒」「碧棗、丹栗」という仙境の描写によっていることがわかる。

（7）浅井了意『阿弥陀経鼓吹』（浅井了意全集仏書編一、岩田書院、二〇〇八年）

（8）虎関師錬撰『元亨釈書』三十巻。引用は寛永元年（一六二四）跋の版本による。

（9）寺島良安編『和漢三才図会』「普陀山」項（大坂：杏林堂、正徳五年跋）参照。

（10）（明）周応賓撰『重修普陀山志』六巻（中国仏寺史志彙刊第一輯、第九冊、明文書局印行、一九八〇年、原版：国立中央図書館所蔵・明万暦三〈一六〇七〉年太監張随刊本）。引用文中の「梁恵鍔」の梁は、同書（普陀山の開山逸話）の「梁貞明二年、日本僧恵萼得観音相於五台山（以下略）」から、その年号を付けたものであると推測する。恵萼法師の唐補陀落山寺開山逸話における史料については、陳狲「中国の観音霊場「普陀山」と日本僧慧萼」（東アジア地域間交流研究会編『から船往来―日本を育てたひとふねまちこころ』中国書店、二〇〇九年）に拠ったところが多い。

（11）（宋釋）志磐撰『仏祖統紀』巻四十二（大日本続蔵経、前田慧雲編：第一輯第二編乙第四套第一―三冊、蔵経書院、一九一〇年）

（12）注10の陳狲の前掲論文「中国の観音霊場「普陀山」と日本僧慧萼」に次のようにある。「早期遣唐使が採用した航路は、一般に北路と称し、朝鮮半島沿いを経由して中国の山東半島の登州・莱州などに上陸するルートである。（中略）南路とは、博多を出てから、五島列島へ向かい、そこから東シナ海を横断し、舟山群島を経由して杭州湾に入り、寧波に上陸する航路である。この航路においては、季節風をうまく利用すれば、三日間から一週間までの短い時間で東シナ海を横断できると言われている。しかし一方、帆の操縦を一歩間違えれば、船は杭州湾より南の地域に流される危険があり、また、舟山群島では、暗礁が多い上、海流の流れも複雑である」。

（13）『日本書紀』巻第六「垂仁記」（清原国賢校訂、慶長十五年跋、無刊記版）

（14）太安万呂撰録『古事記』上巻（風月宗智版、寛永二十一年）。原文は以下に記す。

「（前略）作二堅此国一然後者其少名毘古那ノ神者度二于常世国一也」。

（15）浦島子伝承について、『日本書紀』巻第十四「雄略天皇二十二年」（引用は前掲注13の版本）には、「（前略）浦嶋ノ子感以為婦ニ相逐入ヌ海ニ到テ蓬莱山ニ歴観仙衆」とあり、『万

葉集』巻九「詠水江浦島子一首並短歌」（安田十兵衛版、寛永二十年）には、「（前略）白雲之自箱出而常世辺棚引去者（中略）黒有之髪毛白班奴由奈由奈波気左倍絶而後遂寿死祁流水江之浦島子之家地見」と記されている。

（16）神野富一『補陀洛信仰の研究』（山喜房仏書林、二〇一〇年）参照。

（17）五来重（五来重『続仏教と民俗』角川選書九九、角川書店、一九七九年）によれば、死者を生きているようにして葬る儀礼は、実際に死んだ僧を船に乗せて水葬する形を取る補陀落渡海がその例であるという。棺を海岸まで運ぶとき、大鳥居までは生きている人に話すように言葉をかけながら行くが、大鳥居を出ると同時に念仏に変わる葬式の形である。これは、霊地内では極度に死穢をきらう理由からであるという。

（18）『大方広仏華厳経』「入法界品」では、補怛洛迦（補陀落世界のこと――稿者注）について「善男子。我唯得此菩薩（観自在。観世音の別称――稿者注）所得不般涅槃際解脱。（中略）善男子。於此南方（死後解脱する場所――稿者注）。有山。名補怛洛迦。彼有菩薩。名観自在」といい、南海の彼方にある観音菩薩の浄土、つまり死後ゆく場所としている（引用は大正新脩大蔵経第十巻三六六頁による）。

（19）『妙法蓮華経』巻第八「観世音菩薩普門品第二十五」では「世尊観世音菩薩以何因縁名観世音。仏告無尽意菩薩。善男子。若有無量百千萬億衆生受諸苦悩。聞是観世音菩薩。一心称名。観世音菩薩。即時観其音声。皆得解脱」（引用は大正新脩大蔵経第九巻五六頁による）と、補陀落世界では、観世音の名を唱えると解脱できると記されており、観音の浄土である補陀落は、苦しんでいる人々が、救済を求め死後赴く場所となっているのである。

［付記］本稿は、平成二十八年度六月二十六日第三十六回日本文学協会研究発表大会（於岩手県立大学）における口頭発表の原稿を基に改稿したものである。口頭発表の際に御教示を賜った諸先生方に、厚く御礼申し上げる。